老舗の街・尾張町シリーズ25

尾張町を支えた女たち その拾肆

尾張町の灯は今も

表紙絵　　石野琇一(宝生流教授嘱託・石川郷土史学会)

目　次

はじめに …… 1

なんで森下屋なの …… 2

年のはじめのためしとて …… 3

賑やかな尾張町のお正月風情 …… 5

七連隊の起床ラッパ …… 9

暑い日の結婚式 …… 10

倉の前の風呂炊き …… 13

祖父母の早朝散歩の間の忙しいことったら …… 14

一足早い家庭塗料の販売 …… 17

ものによっては量り売りの油も …… 19

同じ内娘のきりもりで …… 21

あとがき …… 23

はじめに

『声を出し続ける人に長生きは多い』

学校で教える先生、お経をあげるお坊さん、金沢らしいところでは能楽師。確かに、声を出し続けている職業に長命な人を多く見かけます。それも、腹式呼吸的な発声をして、体全体から声を出し、喉などの体の一部だけに負担を掛けるようなことをしない。いわば、長続きのするような声の出し方をしている人が、この長命を授かっているようです。

尾張町の商人も、お客様の喜ぶ顔を見るために、

「いらっしゃいませ。」

「ありがとうございます。」

いつもお世話をすることを生き甲斐にして、こころから声を出しています。ちょうど、長命な人の発声と似通った風にして。

“尾張町を支えた女たち”を聞き書きしながら、皆さんが年齢を超えて一様に元気なのも、ひょっとしたらこの辺にあるのでしょうか。苦労は苦労として、でもそれ以上に人様のために体を精一杯に動かす。そして、気づかないうちに、何よりも自分のご主人を盛り立てるために。

世の中に宝物があるとしたら、いつまでも大事にしてられるもの。その時々に増えたり減ったりする富でなく、いつもそこにあって無くてはならないようなもの。私たちのこころの中にある変わらないもの。というように考える時、尾張町を支えた女たちの価値を見直さなければいけないようです。

商いは飽きずに続けることですから、いつもそこに在る(居る)ことに通じます。もう一歩進んで、在り(居り)続けて欲しい、という段階まで行けば本望なのですが。書き続けて来た皆さんは、自然にその段階になっているように見受けられのです。

私にとっては、そんな皆さんの日常の気持ちを、文章に現わすお世話をさせてもらっている内に、本当に大事なものに触れさせてもらった役得に感謝しています。後は文章を通じてのおすそ分けが、すこしでも読者の方々に通じればと願う次第です。今回も、商売を通じて忘れてはいけないような事柄を多く聞

かせてもらいました。まずはご一読して見てください。

なんで森下屋なの

小さい頃から不思議に思うとったのは、森下屋忠三郎というご先祖さんの名前のことやった。すぐ隣のお菓子屋さんも、森下屋八左衛門と、似た名前やったし。昔の絵図なんかには、加賀屋とか能登屋とか越中屋といったように、ほとんどの店がどこの出の人か分かるようになっていたけど、ここの店の森下というのは、一体どこのことなんやろう。今の地図には、森本という地名はあるけど、ちょっと違うみたいやし。

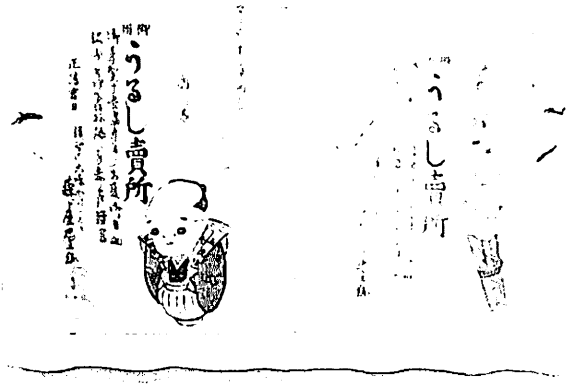
そんな時に重宝するのが、ここの男衆や。父は父で、まるで学者みたいに昔のことに詳しくって自費で郷土の歴史書(シリーズ2に収録の「尾張町物語」)を書くし。血のつながりのない敏雄さん(ご主人)までもが、やたらに書物を読んで詳しいし。本当は、家付き娘の私の方が何もかも知っていなければならないのに、まるで駄目。というか、当たり前すぎて考えたこともなかったというのが本音なんやけど。

おそるおそる聞いて見ると、今の森本を含む浅野川の大橋の向こう側がほとんど森下町と昔は呼ばれていたとか。

時代が天正の頃の話に飛んで、そこに森下城主の亀田大隅とかいう一向一揆の旗頭の一人が住んでいて、一揆の中心になる砦の“おやま御坊”が織田信長の手勢に滅ぼされても、最後まで従わなかったらしい。

いつしか時代が下り、一族残党はいろいろと名前も変え、中には武士になるのが嫌で町人になった人もいたらしい。森下の名前にした人が多かったのかしら、地名までが森下町になってしまったと聞いて、遠い先祖はこの地方では大きな力を持っていたんやな、ちょっこし感心させられたり。またそんなことを聞かれたら、すらすらと答える男衆に感心したり。

森下屋の屋号の由来をやっと納得したと思うたら、妹たちから、たちまち
「そしたら、隣のお菓子屋さんも、川向こうのいろんなお家も、ひょっとしたら皆んな親戚になるんやない。いっぺんにお友達がたくさん増えるのね。」



何しろ若草物語やないけど、私を最初に女ばかり三人も続く四人姉妹のかしましさったらありゃしない。ほんとは下から二番目に弟もいたんやけど、小さい頃に亡くなってしもうたから、父は大変なことやったと思う。賑やかで、楽天的な話を聞きながら、

『金沢って知らないところに親戚が一杯いるんやわ。』

嬉しいことは嬉しいんやけど、何かちょっと肩に乗っかってくるような気がして来る。

年のはじめのためしとて(元旦の一日)

お正月は、除夜の鐘が鳴ったら、店の人は揃って新年の挨拶をしながらお酒を飲んで寝てしまう。二日から始まる初売りに備えてのことや。わたしらも学校が早いから、すぐ寝かし付けられたもんや。

なにせ昭和の始めの頃は、今のように男と女が一緒の学校でなく、味噌蔵町小学校は女、材木町小学校は男が行くことになっていて、“男女七歳にして席を同じゅうせず”なんて言う前のことやった。

元旦は、そやさかい姉妹揃って日の丸の旗が掲げられた味噌町小学校へ朝早く行って、まず教室で

「おめでとうございます。」

と大きな声で一斉に挨拶をしてから、廊下に出てきちんと列を作って講堂へ向かう。

皆んなが揃うて整列すると、まず

「君が世は、千代に八千代にさざれ、いしの....」

を斉唱した後は、

「朕惟(おも)ふに....爾(なんぢ)臣民、父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ、恭倹(きょうけん)己れを持し、博愛衆に及ぼし、學を修め業を習ひ、以て智能を啓発し徳器を成就し....一旦緩急あるときは義勇公に奉じ....みな其徳を一にせんことを庶幾(こひねが)ふ。」

私らには、ちょっと難しすぎて何を言っているんか分からんような教育勅語の一くだりを聞かされ。それから校長先生の訓示と続くと、さすがに立っているのが辛くなって来る。隣近所の子を見回すと、私だけでなく皆んなが立っているのがやっと。ふ〜っと頭が霞みかかるかどうかの頃に

「....以上、終わり。」

校長先生の最後の言葉だけが頭に入って来て、急にしゃんっとなる。背筋を一杯に伸ばして、伴奏に合わせて

「年の始めのためしとて、

　終わり無き世のめでたさを、

　松竹たてて角ごとに

　祝う今日こそ楽しけれ」

「初日の光さし出でて

　よもに輝く今朝の空....」

さあ、これで全部終わった、もうお家に帰れる。と思うたら本当に元気一杯の声が出て来るから不思議なもの。朝の８時から２時間、今どきの子供たちはこんなに立ちっぱなしだったら大丈夫なんかしら。

思い返してみると、こんなに長い間立ちっぱなしになる行事はけっこうあったっけ。

２月11日の紀元節

「雲にそびえる高千穂の....」

難しい話はすぐ忘れるけど、なぜか歌だけはすぐ覚えてまう。歌を歌うといろんなことを思い出してしまうわ。

４月29日の天長節。11月３日の明治節。そうそう、３月６日の地久節は皇后陛下の誕生日やからというので、女の私らだけ学芸会をして、その日は休みになったので、男の子から羨ましがられたっけ。

学校からの帰り道も、姉妹揃って、また

「年の始めのためしとて....」

と歌って家に着くと、すぐにお正月の長寿湯に入らされる。

店の後ろの“せど”(中庭)を挟んだ倉の前のお風呂に行こうとすると、思わず寒さでブルッとする。もともと天井の高い家やから、そんなに暖ったかくないんやけど、やっぱし屋根があるんと無いんでは違うみたい。

風呂上がりのさっぱりしたところで、父に３階の“天窓”(天守閣もどきの明かり取り)のすぐ下の部屋で、“四方拝”をするように言われる。東西南北のそれぞれの神様に向かって一つ一つお参りを済ませると、やっとにっこり笑って久保市神社の初参りに連れて行ってもらえる。

でも、店の人も皆んな、父が帰らないと朝ご飯を食べられないまま待っているので、そんなにゆっくりは出来なかったけど。

賑やかな尾張町のお正月風情

初売りは一日の夜中の12時からやったと思う。前の日の昼過ぎから、店の人はハンテンを出して来て汚れたところを綺麗にしたり、ほころびていたりした

箇所はお手伝いさんに直してもらったり。

そんなことをしながら、手は休みなく初売りの品揃えをする。時間が限られているもんで、いつの間にか皆んな寒いのに汗だくになっている。

「何でもっと先から準備しないの。」

素朴に父に聞いたことがあったっけ。

「お前も商売屋の娘やし、この家は女ばかりやさかい、多分養子をもらわなならんから、この機会に覚えておくといい。年の暮れは、そりゃ商品の棚卸しもあるけど、そんなことよりもっと大事な集金があるんや。どんだけ商売に勢いがあって、商品を売り捌いておっても、最後にお客さんからお金をもらわな、何にもならんのや。家だって長い信用を続けて行くために仕入れ先にはちゃんちゃんとお金を払っているんや。そやさかい、商品を買って頂いたお客さんからも、きちんとお金をもらわないと支払うお金が厳しくなるんや。途中の月ならまだしも、年末にはやっぱりお金を払ってもらわんとね。」

最後の方は優しい顔の中に、商売人の厳しさを感じさせられる一瞬やった。
「ねえ、お姉ちゃん、お父さんと何を話していたの。」
妹たちには、父は決してこんな話をしないやろう。それは、すごく確かなことに感じられたっけ。
私らが出来ることは、力仕事は無理だから、初売りの商品に付ける景品を袋詰めすることかしら。妹たちと、少しは役に立てればと、店の隅の方で手伝っていると、たちまち陽は暮れ、あたりは真っ暗になってしまう。
うつらうつらしていると、急に店の騒めきで目が覚めさせられる。父や店の人の掛け声と慌ただしい動き。通りへ出て見ると、尾張町の町中に明かりが灯り、黒山のような人だかりになっている。
『わぁ〜っ、初売りが始まったんや。皆んなが、お正月をお祝いして買い物に来てくれたんや。』
さっきまで準備していた商品の山が、どんどん売れて行く。今日は、さすが

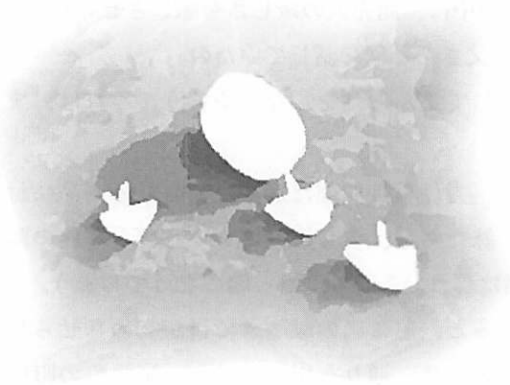
に掛け売りでなく、現金で買う人ばっかりやから、売る方も一層に熱がこもる。
「いらっしゃい、いらっしゃい。」

真夜中と思えない明るさの中で、黒いハンテン姿はとっても格好が良く、中でも父の姿が一等やった。

「お嬢さん、景品はどこに....。」

はい、ここにあるこれよ。遊んでなんかいられない。いつの間にか、私も一緒になって手伝っている。

夜が白み始めると、ようやく一段落。店員さんも、2階の店員室へ眠りに行くし、私らも一眠り。今年はあんなに商品が売れたから、ちょこっとご褒美がもらえるかしら、なんて思いながら....。両手には、森八の“かつお飴”(正月にしか売らない、竹の皮に包んだ鰹の形をした粉付きのニッキ飴)や、恵比寿さんや打出の小槌の形をした福徳(ふくとく)をしっかり持って。



明日、目が覚めたら、福徳の中に入っているオミクジに何が書いてあるか見

てみよお〜っと。

七連隊の起床ラッパ

朝の6時になると、お城の中にいる七連隊からラッパの音が聞こえて来て、目が覚める。距離にしてちよっと離れているはずなのに、やっぱし朝なのかしら、まるで隣の部屋からのようにはっきりと響いて来る。

「おはよう。」

初売りの余韻がまだ残っていて、ちょっとあくびをして起きる。何か、さっきまで止まっていた時計の針が急に動き出したみたいに、周りが騒々しくなる。でも、今日はお休みだから、いつもほどでない。

代わりに店員さんの顔が、いつもよりいそいそとしている。年末の集金も済ませたし、初売りも順調やった。ご主人は、お正月明けの休みに幾ら程のご祝儀を出してくれるやろと、胸算用しているみたい。

表を見ると、兵隊さんも町へ出て来ている。そろそろお休みが取れるんかしら。お城の大手門から尾張町までの中町通りには、そんな兵隊さん相手の店がずらりと並んでいた。軍服屋さん、靴屋さん、研屋さん、だんご屋さん。

でも、ちょっと気張る時は尾張町まで来んと、いい時計屋さんも写真屋さんもないさかいね。きちんとした、後々まで使う物を探して、結構兵隊さんが来ていた。まして、一旦戦地へ行けば、生きて帰れるかどうか分からんだけに、きらびやかそうに見えて、何か悲しい感じもした。明治37年の日露戦争の時なんか、旅順攻撃で4,500人程が亡くなったというし。

そうや、昭和12年に始まった日華事変の時やった。兵隊さんが何人か店に泊まりに来たっけ。大きな店構えをしている処は、ほとんど泊まりに来て、2～3日すると、別の兵隊さんと交代するのや。特に店の仕事を手伝うでなし、何か鉄砲の手入れをしたり、背嚢につける毛布をまく練習をしたりするだけ。

『へ～え、お城の中ではあんなことをしているんや』

知らない世界をかいま見たようで、目を輝かせて見ていると.....。

隅の方で、そんな兵隊さんの一人に、赤ん坊をかかえた女の人が抱きあって、わんわん泣いているんや。

「ねえ、お母さん。あの人ら、何んで泣いているの。」

そしたら、そっと

「あの兵隊さんは、ここのお泊まりが終わったら戦地へ行くのよ。生きて帰れるかどうか分からない戦地へね。」

さすがに、12歳の私でもドキッとするものがあった。そうか、家庭の味を最後に味わいに来ていたんや。あの女の人の姿は、今でも目に浮かぶ。

夜、ふっと目が覚めると、経板井さんが静かに整列して、裏通りにある久保市神社へ集まって行くのが見えた。『ああ、いよいよなのかしら....』

暑い日の結婚式

敏雄さんと結婚したのは、第1回石川県体育大会が金沢で開かれた昭和24年の同じ8月やった。とにかく暑い日だった。さすがに天井が高くて、夏が涼しい

のはまだしも冬は寒すぎると、いつも文句ばかり言っていた家なのに、うだるような暑さでげんなり。

振り袖を着ると、じわりと汗が流れる。せっかくの白粉が台無しになるのでは、と思いつつ敏雄さんを見ると、凛々しい紋付き袴姿。胸が熱くなるよう。まだ嫁いでいない二人の妹からは、

「お姉ちゃん、格好いいお婿さんやね。」

冷やかされながら、二階の座敷で式を挙げた。

「高砂や〜、この浦舟〜に帆をあげて〜。月もろともに入り潮の〜。波の淡路の嶋陰や〜。」

父が稽古していた謡の一節が、今日はちょっと違って聞こえて来た。今までは、ああ謡の稽古をしているんやなあ。という位にしか感じず、耳に流していたのに。自分たちだけのために謡われると、節回しまでもが特別なように聞こえて来る。

後で聞いたら、普通は“月もろともに出で潮の〜”と謡うのが本当なんやけど、祝言の時は縁起をかついでわざと反対にするんやて。

私にとって結婚することは、この家を出て行くことでなく、お婿さんをこの家に迎えることやから、ことさら“花嫁のれん”(結婚する時に一回だけくぐるのれん)をくぐったり、父母との出発の挨拶もなかった。むしろ、妹達とお祭り気分になっとったみたい。

その点、敏雄さんはそれどころでなかったはずや。そりゃ、もしかしたらあの北前船で有名な銭屋五兵衛の一族の流れを汲むかも知れない、金石の網元の次男坊で気丈夫なところがなければ、こんな老舗に入ってこれんかったやろうけど。何しろ、父母だけでなく、おじいちゃんおばあちゃんも揃って元気やったし、二人の妹も残っていたことやから。気遣いで大変やったと、後で思うた。

そんな私らの気持ちは気持ちとして、式は進み、写真も写し、披露宴のお酒も皆んなして飲む間、同じ二階の座敷で二人はじっと座ったまま。だんだん足はしびれるし、顔は笑顔でも早く終ってほしいとさえ思い出したっけ。

やっと宴が終ると、今のように新婚旅行に行くでなし。そのまま二階の新居

の部屋へ移っただけ。3日ほどしてから、穴水のおばさんの処へ行ったのが、もしかしたら新婚旅行になるんかしら。

結婚式の翌日から、いつもと同じ生活が始まり、変わったことと言えば、敏雄さんが一人増えて、お父さんの横にいるようになっただけ。というのが、実利一辺倒の商売家の姿やったし、また私もいつもの生活が始まるのに別段何んも変わった気持ちを持たんかった。

倉の前の風呂炊き

昔の税金は間口割りだったので、尾張町なんかの商店は間口を広げるよりも店の奥行きを伸ばしていたところが多かった。店先から“通り庭”(奥への土間通路)を通って“せど”(中庭)から倉へと伸び、裏通りまで突き抜ける店もあった。合羽屋に時計屋にお菓子屋に、ここの店だってそうやし。

そやさかい、やたらと部屋が多くて、初めて来る友達なんか迷いそうやというんや。そん時は、

「明るい処の方へ向かって行けば、自然と天窓の下へ出るの。天窓は、ここの家の真ん中にあるし、通り庭の上にあるから、そこから簡単に表に出られるのよ。」

と教えることにしている。

数えてみると、おじいちゃんとおばあちゃんの部屋、父母の部屋、私らの新居に使ってる部屋、妹達の部屋、店員さんの部屋、お手伝いさんの部屋、数えると楽に20くらいになるんやわ。確かに部屋はたくさんあるし、ちょっとした旅館が出来るかも。

でも、部屋どうしはくっつき合っていて、廊下がほとんどないの。向こうの部屋へ行く時は、どこかの部屋の中を通って行かないとならないことになる。寝ていても、誰かが頭の上をまたいで通って行くなんてこともしょっちゅう。

さすがに店の人とは部屋の場所が離れているので、家族同志でしか部屋を通り抜けることはなかったけど、本当に誰も入って来ないと安心出来るのは、厠

とお風呂ぐらいかね。

お風呂は、“せど”の奥の倉の前にあって、流しも一緒にあったし。細かいこというたら、そこの処はもう裏通りの新町の地番になるほど奥になるんやけど。店のことは全部父や敏雄さん始め店員の男の人がしていたので、女の私らの受け持ちは自然とこちらになっていた。三度の食事と風呂焚き。

それも、この店が油の卸をしているので、ガスなんか危ない！　と言って使えないの。たきぎを一本づつ釜戸に入れてお風呂を沸かすのは大変な仕事になる訳。ちょっと目を放すと、火の燃え方で湯加減が変わるので、ずっと付きっ切りでなきゃいけないし。万一、そこら辺の油の品物に火が飛んで行ったら一大事。少しも気が抜けない。

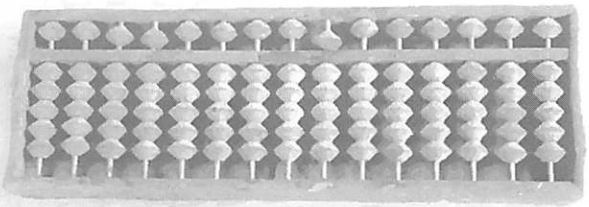
偶然かもしれないけど、この店の当主が代々煙草を吸ってないのも、自分の店の取り扱い商品のせいなのかしら。

祖父母の早朝散歩の間の忙しいことったら

祖父も祖母もチャキチャキの性格で、二人を見ているとおっとり者の私には目が回る思いがしたものやった。朝の5時になるかならんに起きだし、手早く着替えをすると、揃って大手町の方へ散歩に出かけるんや。

さあ、それから1時間ほどが大変。祖父母の部屋のふとんをあげ、掃除をする。それも髪の毛一本落ちてても文句を言われるので、特に念入りに、そして手早く。ああ、“せわしない”(忙しい)。仏さんにもお参りせなならんし、前の日に来ていた母の着物もきちんとたたんで箪笥に片づけて。

敏雄さんは、こんな奥のこまごましたことなんか考えずに店の仕事だけしてればいいのやから。本当にもう。



そっと店先を見ると、敏雄さんは何やら調べものをしている。一つ一つ商品を手に取って、何やら自分なりに書きつけている。何をしているんやろ。

『そうやった。敏雄さんは網元の息子やから、畑違いの油のことは全然知らんの

やった。』

というて、いきなり私のお婿さんになった手前、知らないからと店員さんに聞く訳にもいかず。父に聞くにしても、

『何が分からないか分からない。』

という聞き方は出来ないから、少しでも商品のことを覚えようと勉強しているんやわ。店員さんもまだ店先に出て来ておらんし、厳しい祖父も散歩中のこんな時こそ、誰はばかることないのや。急に後ろ姿が、たのもしく見え出したっけ。

お手伝いさんと一緒に朝ご飯の用意が出来た頃に父母は帰って来る。というても家族の食事だけが手間暇かかるので、店員さんらは箱御前にご飯と吸物だけやから簡単に準備出来る。

祖父、父が座って、その横に敏雄さんが座ると、皆んなで

「いただきます。」

後片づけも、家族の分だけで済む。店員さんは、めいめいが箱御前の中にお椀と箸を片づけてお終い。確か、夜ご飯の後、自分たちで洗っていたはず。

女どもにとっての朝の大騒動はこれにて落着。これからは、男の商いの幕が開くのやさかい。

一足早い家庭塗料の販売

今でこそ、家庭でペンキ塗りなんかするようになったし、ホームセンターもあるようになったけど、あの頃はまだ誰も思いつくかん時代やった。でも、敏雄さんは

「アメリカでは日曜大工が盛んだから、やがて日本もそうなるに決まっている。やるなら、人より先にする方が良い。」

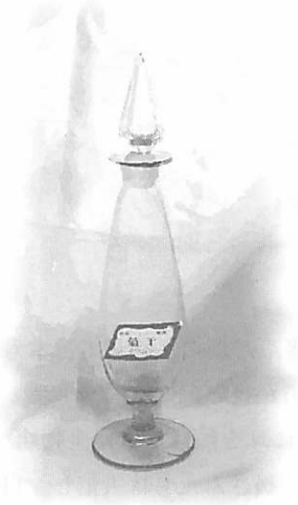
父も、そんな前向きな話に耳を傾け、早速金物店へ家庭塗料を卸すようにした。これが案外と流行り、店員さんたちは大忙し。自転車に一斗缶を4つも積む

と、バランスを取るのが大変。ちょっとふらつくと、とたんにガシャンと自転車毎に倒れてしまうし。せめて道が真っすぐならまだしも、戦争で爆弾が一発も落ちんかった金沢の道は、曲がりくねっているわ、袋小路にはなっているわ。若い店員さんなんかは、まだ道をはっきりと覚えとらんもんで、可哀想なくらい。

でも、年配の得意先の場所をしっかり知っている店員さんには、あの重い一斗缶が持てる訳でなし。若いからこそ体力もあって、持って行けるやさかい。よろよろと頼りなげに配達に出る姿を、おくからそっと見ていた。

そのうち、リヤカーが出て来て、一度にたくさん運べるようになると、金沢市内の配達は随分と楽になった。急ぎのお客さんには、申し訳ないけど店に来てもらっていたのも、だんだん少なくなって来た。家庭塗料が広く使われ出すと、色数も増え、逆に一斗缶でなくて私でも持てる小さな缶になって来たのも時代なのかしら。

まして、車で物を運ぶのが当然になってから、あんまり目方のことは言わんようになってしもうた。店に来るお客さんも、特殊な油の量り売りが目当てだったりと、様変わりし始めている。



ものによっては量り売りの油も

本当は缶やビンに入ったものをそのまま買ってもらう方がどんなに楽か。まして小売りよりも卸が主なこの店では、量り売りは手間暇ばかり食う。儲けだけを考えたらやらない方がましなのだけど、

『お客さんの役に立つことを第一に』

という代々の家訓じゃないけど、やっぱし喜んで買ってもらうことは商売を続けている喜びにもなるし。

どこでどう聞きつけて来るんか、聞いたこともない油がないかと問い合わせに来られたりして、店先のカウンターで思わず答えに詰まったりすることも。それでなくても、油脂や塗料、溶剤、接着剤、防腐剤に殺虫剤、床清掃剤、染料や絵の具類、ミシン油、ベンジン、シリコン、蝋燭に石鹸。まだまだあるんやけど、全部覚えきれない。

鬢付け油に使う椿油を買いに来られたお客さんなんか、

「天ぷら油の代わりに使うと美味しいと聞いたもんで。」

と言われ、あんな高いものをもったいないと思いながら量り売りさせてもろうたっけ。あと、灯明油も扱っているので、もうどこにもないもんで見つかって良かったなどと重宝がられると、本当にこちらも嬉しくなる。

お客さんの持って来られたビンを預かり、少ない場合は升に入れて分量を量り、じょうごを使ってビンに入れる。多い場合は、一斗缶を開けるところから始まる。上蓋の三方を切り取って杓で汲んで適当な器に入れ、秤にかけて重さを調べてから、升に入れて、じょうごを使ってビンに入れる。

この手間暇は結構大変なんだけど、お客さんも辛抱強く待ってられるので、その間に知っている限りの買ってもらった油の説明なんかをすることもある。

聞くところによると、お酒も昔は量り売りしていたとか。狸の焼き物が持っているとっくりを持って、お客さんがその日の懐具合でお酒の量を決めていたらしい。酒屋さんでは、そのとっくりに番号を書いておいて、何番のお客さん

がいつ、どれだけ掛け買いしたか帳面に書いておいて、後で集金し易くしたという。

この店はそこまではしないけど、金額の多寡でなく、お客さんの笑顔の多さでその日の商いの成果にしているつもり。

同じ内娘のきりもりで

私が奥のことにかかりっきりで、あんまし店のことについて知らないままにしているのも父や敏雄さんが元気な内はいい。商店街の婦人部の旅行で温泉へ行っても、夫が迎えに来るのは私だけやと喜んでいる間に、敏雄さんは病気がちになり出してしもうた。

おろおろとしている私を尻目に、昭和30年に生まれた二番目の娘が、番頭さんと何やら話している。何を言ってるんやろ、と手元を見ると算盤片手に計算をしている。そのうち、娘は帳場に座りだし、番頭さんや店員さんといろいろ打ち合わせる姿が目立つようになった。

私は商売のことは分からんし、敏雄さんもあの娘に商売の仕方なんか教えたはずがないのに。どこで、いつの間に覚えたんやろ。見よう見真似で、父母のチャキチャキな性格が商売に目覚めさせたんやろか。商売をするのが当たり前に見えた父、努力家だった敏雄さん、手探りし出している娘。三人三様の姿に何か不思議な胸の温かさを感じさせられる。

あれから敏雄さんが亡くなり、娘は店の仕事をしながら、ようやく平成元年に結婚をした。この店を引き継いで行くために、養子さんをもらったんやけど。もう仕事は、娘が店先に出てやっている。

「いらっしゃいませ。ありがとうございます。」

森下屋忠三郎から代々続くこの店の“こころ粋”は、人が変わってもしっかりと根づいているようや。

森和子・媼(おうな)について

大正１４年１月１４日生。森下屋忠三郎を代々名乗る店(森忠商店)に生まれ、養子に迎えた夫とともに、さらに商いの伝統とこだわりを続けて、時代を超えた繁栄を続けている。そのこころ粋は、次代の娘夫婦にも受け継がれている。

あとがき

振り返ってみると、老舗の街尾張町シリーズは25冊にまで至っていました。最初は尾張町で商いしていて、何かこの街の生活している潤いの根拠を求めて、素朴に歴史を調べ始めただけだったのに.....。

いつの間にか、西暦に換算すれば四半世紀の数にまでなり、小冊子といいながら全部で450ページ程の厚みを持つようになって来ていました。ひたすら史料を集め、謙虚に先人より話を聞き、今この機会を逃したら失われてしまうかもしれない。という駆り立てられるような気持ちを抱きながら、書き連ねて来た道のり。

完成されたものを書くためにいつまでも再考しているより、書きながら完成させて行こう。一冊仕上がるごとに、何かしら気づくことが出てくるけど、それは次の小冊子で反映させよう。そうすれば、段々に完成されたものを書けるようになるはず。という姿勢で貫いて来ました。

緻密に読む方にとっては、だから多少おかしい処も出てくると思います。お気づきになったら、教えてください。早速、次回に反映させて参りますから。

けれど改めて読み返して見ると、活字になった文字の背景に、くっきりと私自身の人生が書かれていることに気づかされます。古老や媼の語り口にさえ、それがちらほらと現れているのが見えさせられます。書き手の、私というフィルターを通していることがそうさせるのか。

書き残して行くことは、また社会の中に書き刻んで行くことにも通じます。直接には自分のことを書いていないから、との安心感はあり得ないようです。勿論、小冊子を書くという行為を通じて、知らず知らずのうちに多くの事柄の知識と、好意ある人々からの生き方の知恵を、学ばさせてもらいました。それも、正確に書き表すために一層真剣な気持ちとなって、目と耳をそば立てて。

これがB型の私にとっては、自分の人生観に一本のきちんとした筋道を通すのに大きな指針となっていたのです。ところが、このシリーズ25を書き終えて見て、さらに深い意味での社会的責任(間接的に自分を表現していること)を発見し、さらに真摯な気持ちで襟元を正しています。

どうか書き続けられる限り、皆さまのご叱咤とご支援をよろしくお願い致します。

最後に自分の損得でなく、何かもっと大きなもののために、たまたま私という個体が運命の関わりの中で、この小冊子のお世話をさせてもらっている幸せに感謝申し上げます。ありがとうございます。

《さし絵の説明》

項　　目	内　　容
○表 紙	「昔のらんぷ」
<目 次>	
○なんで森下屋なの	「うるし売所の引き札」
○賑やかな尾張町のお正月風情	「屋号の入ったハンテン」
	「大福帳」
	「くじの入った福徳」
○七連隊の起床ラッパ	「金沢城の大手門」
○暑い日の結婚式	「香油と書かれた鉄板看板」
○倉の前の風呂炊き	「屋根の上の天窓」
	「辨柄朱の袋」
○祖父母の早朝散歩の間の忙しいこと	「そろばん」
	「店員さんの箱御膳」
○一足早い家庭塗料の販売	「はけ」
	「三角の透明ビン」
○ものによっては量り売りの油も	「油を入れるビン」
	「油の秤」
○同じ内娘のきりもりで	「店の看板」

発　行＝１９９９年３月吉日
著　者＝石野　琇一
さし絵＝石野　琇一
発行所＝金沢市尾張町１丁目１１番８号
尾張町商店街振興組合
尾張町若手会